

ツテ居ルノダシ、又斷交スル以上自然講和會議ニモ參加スルコト成ルダラウカラ。山東問題ハ全部我ニ委ネテ口ヲ出サヌト云フコトヲ條件トシテ、斷交ニ同意スル様ニセヌト、悔ヲ後日ニ殘ス虞ガアルト思ヒ、筆者ハ三度口ヲ極メテ之レヲ進言シタガ、本野外相ハ山東問題ハ最早英佛露伊トノ間ニ解決サレテ居ルカラ、夫レニモ拘ラズ日支條約ノ效力ニ付テ支那ニ口ヲキカス様ナ事ガ在ツテハ日本ノ破滅ダ、世界ニ於ケル我國ノ地位ニ鑑ミ斯クノ如キ事態ガ起リ得ルトハ思ハヌガ、若シ起ラセル羽目ニ陥ラネバナラヌ事ニ成ツタラ、其事自體デ我國ノ地歩ハ失ハレルノデ、餘計ナ心配デアル許リデ無ク自ラ日本ヲ輕侮スルモノダト反駁サレタ。其所論ニモ一應ノ理ハアルガ、加藤外相時代カラ支那引入反對論ノ先鋒ニ立チ、此種ノ危懼ヲ絶エズ抱イテ居タ筆者ハ、或ハ先入主ト成ツタ僻見ニ累セラレテ居タノカモ知レヌガ、何ントナク氣ニ成ツテナラヌノデ外相トハ赤ノ他人デハナシ寺内伯ハ同郷ノ先輩デ役人トシテ以外ノ關係モアルカラ、寺内首相ニモ前記ノ危懼ヲ縷陳シタガ、遂ニ此保障ガ取付ケラレズニ終ツタノハ、返ス返スモ殘念デアル。

第二十二章 我國ノ講和準備

講和準備委員會ノ構成ト事業

大正三年十月加藤外務大臣カラ講和準備ノ爲メニ必要ナ材料ノ蒐集調査ヲスル様内命ニ接シタ筆者ハ、欣然之レヲ快諾シテ早速其研究ニ着手シタ、然シ獨リデハ何分ニモ手不足デ困ツテ居タラ「ブルツセル」ヲ引揚當時獨逸軍ニ拘禁サレタ木村書記官ガ翌年三月歸京シタカラ、同書記官ノ協戮ヲ得テ八月二十六日一應ノ調査ヲ終ツタノデ、正式ニ委員會ヲ設ケテ研鑽ヲ續ケタ、其顛末ハ大正五年十二月幣原委員長カラ本野外務大臣ニ提出シタ報告書ニ詳細記シテアル、此報告書ハ相當長文ダガ、我政府ガ講和ノ用意ニ腐心シタ一班ヲ紹介スル爲メニ左ニ之レヲ掲ゲル。

一 設立ノ趣旨

大正三四年役ハ青島陥落、獨逸東洋艦隊殲滅ト共ニ、帝國ノ關スル限リ實際ノ戰鬪一段落ヲ告ゲタルヲ以テ、豫メ歐洲大戰爭後ノ講和ニ關シ、各種ノ事項ヲ調査研究シ置キ、形勢一變何時講和會議ノ開カルルアルモ、豫算ナカラシムルノ準備ヲ爲スノ要アリトシ、大正四年九月十日大隈外務大臣ハ外務省内ニ日獨戰役講和準備委員會ヲ設ケ、外務、陸軍、海軍ノ三省及法制局員中ノ諸員ヲ以テ委員ト爲シ、該委員會ノ調査ノ方針ヲ定メ、講和ニ關スル一切ノ事項ヲ攻究シテ、講和會議ニ對スル準備ヲ爲スヲ目的トシ、事帝國

ノ外交政策又ハ一般政略ニ至ル事項ハ之レヲ廟堂ノ裁決ニ譲リ、專ラ講和ニ關スル事項ノ法理上及事實上ノ調査研究ヲ本旨トスベキ旨訓示セラレタリ。

二、設立迄ノ準備

是ヨリ先キ大正三年十月加藤外務大臣ハ他日講和準備調査ノ要アルベキヲ慮リ、公使館一等書記官長岡春一ニ命ジテ準備調査資料ノ蒐集編纂ニ着手セシメ、次デ公使館三等書記官木村銳市ヲ其補助員トシテ、半年餘ニテ一應先例及關係文書ノ蒐集ヲ終リ、略講和準備トシテ調査攻究スベキ事項ヲ選定シタリ。

三、委員會ノ組織

此ノ如ク講和準備委員會ノ調査事項及參考資料略蒐集編纂ヲ了セシヲ以テ、大正四年九月十日附ヲ以テ講和事項ニ最關係深キ外務、陸軍、海軍ノ三省及法制局員中左ノ諸員ニ本會委員長及委員ヲ命ジ、外務大臣ノ指揮監督ノ下ニ委員會ヲ組織シ、講和準備事項ノ調査研究ニ從事セシメラレタリ。

委員長
委員

外務次官 松井慶四郎

外務省

外務省通商局長 坂田重次郎

外務省政務局長 小池張造

外務書記官 松田道一

公使館一等書記官法學博士 長岡春一

外務書記官 廣田弘毅

外務書記官侯爵 小村欣一

公使館三等書記官 木村銳市

外務省囑託帝國大學法科大學教授法學博士 立 作太郎

法制局

帝國大學法科大學教授兼法制局參事官法學博士 牧野英一

法制局參事官 黑崎完三

陸軍省

陸軍省陸軍省軍務局長陸軍少將 山田隆一

陸軍省參事官兼馬政局書記官 立花俊吉

海軍省

海軍省軍務局長海軍少將 秋山真之

海軍省參事官兼鐵道院理事 山川端夫

爾來大正四年十月十八日ヨリ大正五年十二月二十五日ニ至ル迄前後三十一回ノ會議ヲ重ネタリ、此間官廳事務ノ都合等ニ因リ委員長及委員ニ左ノ變動ヲ來セリ。

委員長

特命全權大使 松井慶四郎

大正四年十月二十八日本會委員長ヲ免ゼラル

外務次官 幣原喜重郎

大正四年十月二十八日本會委員長ヲ命ゼラル

委員

外務省

外務書記官 廣田弘毅

大正四年十月十八日本會委員ヲ免ゼラル

外務書記官 田中都吉

大正四年十月十八日本會委員ヲ命ゼラレ大正五年三月十三日委員ヲ免ゼラル

外務省參事官 奥山清治

大正五年三月十三日本會委員ヲ命ゼラル

陸軍省

陸軍省軍務局長陸軍少將 山田隆一

大正五年一月十九日本會委員ヲ免ゼラル

參謀本部第二部長陸軍少將 福田雅太郎

大正五年一月十九日本會委員ヲ命ゼラル

騎兵少佐 植田謙吉

大正四年九月二十三日ヨリ大正五年三月二十九日迄立花委員病氣ニ付其代理委員トシテ本會會議ニ列席ス

歩兵大佐 大竹澤治

大正五年六月十四日ヨリ福田委員官命ニヨリ歐洲出張ニ付其代理委員トシテ本會會議ニ列席

海軍省

海軍省軍務局長海軍少將 秋山眞之

大正五年一月十九日本會委員ヲ免ゼラル

軍令部出仕海軍少將 森山慶三郎

大正五年一月十九日本會委員ヲ命ゼラル

以上各委員ヲ以テ本會ヲ組織シ本會會議ヲ開キント同時ニ、本會調査事項ニ付委員中ヨリ特別委員ヲ選ビ委員長ヨリ特別調査ヲ委託シ本會會議以前ニ特別委員會ヲ開キテ調査報告ニ努メシメタリ、其特別委員左ノ

如シ。

山東鐵道ノ法理問題調査特別委員

立、長岡、木村、牧野、黑崎委員

獨領南洋諸島獨逸諸會社問題調査特別委員

立、長岡、木村、牧野、山川委員

山東省租借地問題特別委員

長岡、小村、木村、黑崎委員

條約案起草特別委員

長岡、木村、黑崎委員

講和ニ關係アル國際法規問題特別委員

立、長岡、木村、牧野、立花、山川委員

工業所有權問題特別委員

奥山、黑崎委員

四、會議ノ概要

本委員會組織成ルヤ豫テ外務省ニ於テ調査蒐集セル調査參考資料ヲ各委員ニ配布シ、且曩ニ選定作成セル調査事項並ニ之レニ關スル意見書及決議案ヲ以テ原案トシ、之レヲ本會討議ノ基礎トシテ調査研究ノ歩ヲ

進ムルコトトセリ。

大正四年十月十八日第一回會議ヲ外務省ニ於テ開會シ先ヅ議事規則ヲ討議シ左ノ通り決定ス。

(一)、委員會開會日

十二月一日ヨリ毎週一回水曜日午後一時三十分外務省ニ於テ開會ノコト。

(二)、會議錄

各會議々事ノ概要ヲ記錄スルガ爲メ、會議錄ヲ作成スルコト。

之レガ作成ハ木村書記官擔任スルコト。

(三)、討議順序

委員會ハ既送意見書ヲ基礎トシ、原則トシテ左記順序ニ從ヒ審議ヲ進ムルコト、但シ既送意見書記載事項中其審議前、關係國間ニ解決ヲ了シタルモノハ之レヲ附議セザルコト。

討議順序ヲ變更セムトスル場合ニハ少クトモ一週間以前ニ之レヲ提議シ、委員會ノ決議ヲ經ベキコト。

新問題ヲ委員會ニ附議セムトスル場合ニハ、之レニ關スル提案ハ總テ文書ヲ以テシ、意見書及決議案ヲ添へ、少クトモ一週間以前ニ之レヲ各委員ニ配布スルコト。

第一、帝國ノ對手交戰國

第二、山東鐵道及鑛山ノ處分

第三、青島上海及青島芝罘間獨逸海底電線ノ處分

- 第四 獨逸領南洋諸島獨逸會社ノ處分
- 第五、帝國ガ獨逸ノ殖民地及租借地ヲ取得スル場合ノ形式
- 第六、帝國ガ獨逸ノ殖民地及租借地ヲ取得スル場合ニ生ズベキ附隨案件
- 第七、割讓地官公私有財産ノ處分、住民ノ國籍等
- 第八、私有財産
- 第九、戰爭ニ基ク個人ノ損害
- 第十、講和條件
- 第十一、日土通商條約關係
- 第十二、帝國ト獨逸二國トノ通商條約關係
- 第十三、債 金
- 第十四、休戰條約
- 第十五、俘虜、撤兵及拿捕商船
- 第十六、講和假條約
- 第十七、講和會議開催地
- 第十八、講和會議參列國
- 第十九、講和會議參列國ノ發言權及決議權

第二十、講和會議討議事項ノ範圍

- 第二十一、講和會議ノ構成
- 第二十二、講和條約ノ態樣
- 第二十三、「サイブラス」及埃及
- 第二十四、蘭領印度及葡領「チモール」
- 第二十五、講和雜觀

(四)、各委員分擔調查事項

各委員ハ既配付意見書ニ對シテ充分ノ講究ヲ爲スノ外特殊事項ノ調査ヲ擔任シ、遅クモ該事項審議豫定日ヨリ一週間以前ニ其調査書ヲ各委員ニ配布スルコト。

本議事規則ニ基キ委員會ヲ開キ討議順序ニ從ヒ討議攻究ヲ重ネ、其間特別委員會及各委員ハ其分擔事項ニ付テ調査ヲ遂行シ、或ハ文書或ハ口頭ヲ以テ本會ニ其調査ノ結果及意見ヲ報告シ且參考資料ヲ提供シテ本會ノ討議攻究ヲ助ケ、大正五年十二月二十五日ニ至ル迄會ヲ重ヌルコト三十一回、年ヲ經ルコト二年ニシテ豫定ノ調査事項全部議了シタルヲ以テ、此間本會ニ於テ決議セル事項及其説明ヲ一括シテ別冊「日獨戰役講和準備委員會決議及説明」ヲ作製シ、之レヲ再議ニ附シタルニ全委員ノ可決スル所トナレリ、尙本會委員會ノ討議調査ノ實況ハ別冊「日獨戰役講和委員會會議錄」ニ詳ナリ。

五、本會調査事業ノ成果

此ノ如ク本委員會ハ外務大臣ノ指揮監督ノ下ニ、二年ニ亘リテ調査討議ニ從事シ、一應其調査ヲ終了セリ素ヨリ戦局ノ推移、國際關係ノ變遷ニ伴ヒ、新ニ研究ヲ要スル問題發生シ、更ニ探查ヲ要スル事項生起スベキヲ以テ、講和準備ノ業ハ眞ニ講和會議ノ開カルルニ至ル迄終ヲ告グベキモノニ非ズト雖モ、主要ナル事項大體攻究ヲ終リシガ故ニ、之レヲ一段落トシ本會ニ於テ久シキニ亘リ攻究調査セシ結果ヲ、一應茲ニ閣下ニ報告ス。

小官今本委員會ヲ代理シテ本會ノ成立及調査ノ經過ヲ報告スルト同時ニ、本會ノ調査事業ノ成果タル左記ノ書類ヲ、閣下ニ提出スルノ光榮ヲ有ス。

(一)、日獨戰役講和準備委員會決議及説明

本會討議ノ結果タル講和準備ニ關スル決議及其説明ヲ集録ス。

(二)、日獨戰役講和準備委員會會議錄

本會會議ノ概要ヲ記錄ス。

(三)、日獨戰役講和準備調查意見書

本會討議ノ基礎トシテ立案セラレタル意見書及決議案並ニ右ニ對スル各委員ノ意見書ヲ收録ス。

(四)、日獨戰役講和準備調查附屬參考資料

本會討議ノ議題タル該事項ニ關スル條約其他ノ公文書並ニ之レニ關スル先例ヲ輯録ス。

(五)、日獨戰役講和準備調查附屬參考調查書上下二卷

本會討議事項ニ關スル一切ノ調査、就中各委員ガ其分擔調査事項ニ關シ提出セシ調査報告ヲ輯録シ、且附屬參考資料印刷後入手セル公文書其他ノ資料ヲモ併録ス。

(六) 索引總目錄

以上五種ノ書類ニ亘リテ彼我對照閱覽ノ便ヲ計リ索引ヲ作製ス。終リニ臨ンデ本會ノ事業タル範圍廣汎ニ亘リ、問題亦複雜困難ナルモノアリ、而カモ各委員皆別ニ繁劇ナル公務ニ從事セルニ拘ラズ、猶日夜精勵本會ノ爲メニ盡シタル努力ト、其熱心ナル調査研究ノ功果ニ就テ、本會委員長トシテ之レヲ閣下ニ報告スルヲ得ルハ小官ノ欣幸トスル所ナリ。

筆者ノ 巴里 赴任

以上ノ報告書デ大凡ノ想像ハツクト思フガ、講和會議ニ臨ム爲メノ準備ハ、慎重ニ又詳細ニ研究シ盡サレタノデアアル、然シ東京デ考ヘタ事ガ必ズシモ歐洲ノ空氣デハ適切デナイ事モアラウシ、又實戰ノ圈内ニ入ラヌト考エ及バヌ事モアルダロウカラ、親シク歐洲ニ行ツテ更ニ頭ヲ練ル必要ガアル、筆者ハ此見地カラ歐洲在勤ヲ懇請シ、大正六年八月東京ヲ發足シ西比利亞經由デ佛國ニ赴任シタ。筆者ガ哈爾賓ニ着イタノハ九月ノ初メデ「コルニロフ」ガ「ケレンスキー」ノ軟弱ニ憤慨シ、手兵ヲ率キテ露京ニ進撃シタ時デアアル。筆者ハ當時佛國ノ「ル、ハーヴル」ニ政府ヲ移シテ居ル白耳義ニ駐劄スル安達公使及筆者ト同ジク巴里在勤ノ武富書記官ト同ジ汽車デ旅行シタ。

旅 中 雜 感

西比利亞ノ狀態ハ亂雜極マルモノデ萬事ノ秩序ハ皆無デアアル、露西亞本部ニハ食糧ガ不足シ、又汽車ガ足りズニ軍隊ノ輸送ヤ移動ニモ困難ダト傳ヘラレテ居ルノニ、西比利亞ニハ食物ガ豐富デ貨車モ到ル處ノ停車場デ澤山見受ケタ、露軍ノ振ハナイノモ、帝政ノ没落シタノモ他ニ澤山原因ハアルダロウガ、物ヲ動カス組織系統ガ遲緩無秩序デ、行政機能ノ不活潑ナコトガ其一大原因ヲ爲シテ居ル様ニ思ハレタ。筆者ハ西比利亞デ旅客ガ盛ンニバタヲ買入レテ居ルノヲ見テ、何ノ爲メカト思フテ居タラ、汽車ガ露京ニ着クト彼等ハ停車場デ其バタヲ賣リ初メタ、バンデサハ非常ニ缺乏シテ居ル其頃ノ露京ダカラ、バタ等ハ無論拂底ダ、見テ居ル間ニ皆賣リ盡サレテシマツタ、聞ケバ之レヲ商賣ニシテ居ル者ガ澤山アツテ、汽車賃ヲ拂ツテ優ニ儲カルトノコトダ。

武裝自動車デ市中ヲ警戒シナクテハナラヌ様ナ露國ノ狀態ヲ目撃シテ頗ル悲觀サセラレタ筆者ハ、芬蘭、瑞典ヲ通過シ、諾威ノ「ベルゲン」カラ船ニ乗り、英國ノ驅逐艦二隻ニ兩舷ヲ護衛サレナガラ蘇格蘭ノ「アバデーン」ニ十月十七日ノ未明上陸シテ一安心シタガ、聞ケバ吾々ノ船ガ北海ヲ横斷シテ居ル時ニ、獨逸ノ巡洋艦ガ出動シテ諾威ノ運送船四隻ヲ擊沈シタトノ事ダ、之レガ誤傳シテ安達公使ノ乗船ガ遭難シタト新聞ニ出タノデ、公使ハ應對ニ多忙ダツタ様ニ見受ケラレタ。同夜汽車デ吾々ハ倫敦ニ向ヒ更ニ安堵シタ、矢田總領事ニ招カレテ久シ振ニ「オペラ」見物ニ「ドリル、レーン」ニ行き、始メテ「マスネ」ノ「フオースト」

ヲ英語デ歌フノヲ聞イタガ、國ヲ舉テノ戰爭ノ眞最中ニ矢張り夜會服ノ盛裝デ芝居見物ヲシテ居ル英國人ノ氣分ニ敬歎シタ。芝居ガ終ツタノハ十二時五分前デ、出テ見ルト獨逸航空機襲來ノ警報ガ在ツタノデ乗物ハ何モ無い、已ヲ得ズ地下鐵ニ乗ツテ歸ツタガ、翌朝聞ケバ十二時ニ「ピカデリー、サーカス」ニ爆彈ガ落下シ。多數ノ死傷者ガ在ツタトノ事ダ、好奇心ニ驅ラレテ行ツテ見タラ、此廣場ヲ周ル各店ノ窓硝子ハ全部壊レテ居タ、若シ前夜「タキシ」ガ在ツタラ筆者ノ車ハ丁度十二時ニ「ピカデリー、サーカス」ヲ通ツテ居タノデ、北海ト云ヒ今回ト云ヒ二度迄危難ヲ免レタ幸運ヲ祝福セズニハ居ラレナカツタ、然シ二度アルコトハ三度アル、今度モ幸運カ乃至ハ破滅カ、英吉利海峽ノ横斷ハ多少氣ニ成ラナイコトモナカツタ。十月二十三日夜「サウザンプトン」カラ「ハーヴル」行ノ船ニ乗り、疲レテ居タノデ間モ無ク眠タガ、目ガ醒メルト船ガ動イテ居ラヌカラ最早「ハーヴル」ニ入港シタノカト思ツテ聞イテ見ルト「サウザンプトン」カラ少シ出ルト獨逸潜水艇ガ近所ニ居ルトノ警報ガ在ツタノデ、引返シテ來テ未ダ出帆シナイノダトノ事ダ、是レデ三度ノ疫モ落チタト安心シテ眠タラ、目醒メタ時ニハ船ハ既ニ「ハーヴル」ニ着テ居タ。

「ル、ハーヴル」ニ於ケル白耳義政府

前ニ一寸書タ様ニ當時白耳義ノ政府ハ「ハーヴル」ニ移ツテ居タノデ、筆者ハ安達公使ト同地デ分レテ巴里ニ向ツタ。白耳義ハ何人モ知ツテ居ル様ニ、戰爭ガ初マルト獨逸軍ノ侵入ヲ受ケ、其永世中立ハ蹂躪セラレ當時ハ「イーブル」附近ノ一角ヲ僅カニ保持シテ居ルニ過ギナカツタ、白耳義ハ何故ニ斯クモ容易ニ侵略サ

レタカ、其永世中立ハ何ノ爲メニ設ケラレ、又何ガ故ニ悲惨事ニ遭遇シタカ、筆者ハ明治四十四年ノ暮カラ大正二年ノ春迄同國ニ居テ、當時見聞ノ儘ヲ書キ付ケテ置タ紙片ヲ發見シタ、既ニ陳腐ノ事モ多ク舊聞ニ屬シテハ居ルガ、何カノ參考ニ成ルカト思ヒ章ヲ改メテ之ヲ拔萃スル。

第二十三章 白耳義ノ永世中立

其ノ由來

一八三〇年秋白耳義ガ和蘭ト分離ノ軍ヲ起スヤ、其獨立ヲ商議スル爲メ倫敦ニ集合シタ奧、佛、英、普、露五國ノ代表者ハ、一八三一年一月二十日「分離ノ基礎」第五條デ白耳義ヲ永世中立國ト承認スルト同時ニ、其中立並ニ領土ノ保全及不可侵ヲ保障スルコトヲ約シ、同年六月二十四日ノ「十八個條」條約デ之ヲ確認シタガ、此條約ハ和蘭ノ拒絶スル所トナリ、幾何モナク白耳義軍ハ和蘭兵ノ爲メニ大敗ヲ蒙ツタカラ（一八三一年八月）、白耳義政府ハ英國ニ仲介ノ勞ヲ依頼シ、前記五國ノ全權ハ同年十月十五日倫敦デ「二十四個條」條約ニ調印シ、白耳義ヲ獨立ニシテ永世中立ノ一國家ト宣言スルト共ニ、五國ハ條約施行ノ保障ニ任ズベキコトヲ約束シタ。然シ和蘭ハ容易ニ此條約ニ同意セズ、漸ク一八三九年四月十九日ニ至リ白耳義ト條約シテ其獨立ト永世中立トヲ承認シ、而シテ五國ハ白蘭兩國ト各別ニ此條約ヲ保障スルノ條約ヲ結ンダ。故ニ五大國ガ白耳義ニ對シテ爲タル保障ハ單ニ其獨立ト永世中立トニ關スルモノデ、夫ノ「分離ノ基礎」又ハ「十八個條」條約ニ於ケルガ如ク白蘭領土ノ保全及不可侵ニ對スル保障ハ少シモ存在セヌノデアル。

列強ガ白耳義ヲ永世中立ト宣言シタ事情ヲ尋ヌルニ、一八一五年列國ガ「ペイ、バー」王國ヲ設ケ、和蘭ト白耳義トヲ合一シタノハ、之ヲ以テ佛國ノ攻撃ニ備ヘル要柵トスルノヲ主タル目的トシタモノデ、一八一